

研究・調査報告書

報告書番号	担当
119	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
The acute effects of caffeinated versus non-caffeinated alcoholic beverage on driving performance and attention/reaction time. カフェイン入りアルコール飲料のカフェインなしのアルコール飲料と比較した運転パフォーマンスと注意/反応時間への急性効果	
執筆者	
Howland J, Rohsenow DJ, Arnedt JT, Bliss CA, Hunt SK, Calise TV, Heeren T, Winter M, Littlefield C, Gottlieb DJ.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
<i>Addiction</i> . 2011 Feb;106(2):335-41.	
キーワード	
カフェイン、アルコール飲料、運転	
要 旨	
<p>カフェイン入りアルコール飲料 (e.g. Red Bull with vodka) といった「エネルギー飲料」を販売促進するマーケティングは若年飲酒者をターゲットとしており、カフェインがアルコールの鎮静作用を弱め、敏捷性を促進する期待感を持たせている。このようなことは予期し得ぬリスクをもたらす可能性がある (e.g. 飲酒運転)。本研究の目的は、カフェイン入りアルコール飲料のカフェインなしのアルコール飲料と比較した模擬運転作業と注意/反応時間への急性効果を明らかにすることである。2×2 グループ間ランダム試験で参加者に 4 条件のうちの 1 条件を割り当て試験を行った (ビールとノンアルコールビール、カフェイン添加あるなし)。カフェインは市販のカフェイン入りビールと同程度、加えた (69 mg/12 oz ビール、4.8%アルコール)。被験者は 127 名の一時的な若年飲酒者 (21-30 歳) で大学生か直近の卒業生とした。目標とする呼気アルコール濃度は 0.12 g%とした。運転パフォーマンスは精神運動警戒タスク (Psychomotor Vigilance Task, PVT) で持続注意/反応時間を運転シミュレーターで調べた。この結果、アルコールは顕著に運転パフォーマンスと注意/反応時間を損ねた。これに対し、カフェイン添加はなんら影響を与えなかった。以上より、カフェイン入りアルコール飲料摂取時も、アルコール飲料摂取時同様の影響が運転時にもたらされることがわかった。</p>	